

本校は、校訓「大和(たいわ)」のもと、「心豊かで自ら学び、心身ともにたくましい生徒の育成」を教育目標に掲げ、特に「豊かな心の育成」に重きを置き、道德教育を教育活動の大きな柱の一つとして職員が一丸となって教育活動を行っています。

## 全校一斉道德 テーマ「よりよく生きるための生活習慣とは」

今年で5年目を迎えた「全校一斉道德」 午前中、全校で同じ教材を使って授業を行い、午後は、その教材につながるテーマで、ゲストティーチャーから話を聞き、道德的価値観をより深めることを意図しています。本年度は、マラソンプロアスリートの神野大地選手をゲストティーチャーとしてお招きしました。



### 【各クラスでの道德授業】

2年生の道德教科書にある『箱根駅伝に挑む』をもとに、各クラスで授業を行い、テーマについて考えました。



### 【全校一斉での道德授業】

ゲストティーチャー神野大地選手から実際にお話を聞きました。生徒は、神野選手の姿から今後の自分の生き方について考えました。

## 校外学習 名古屋城・名古屋港水族館



1年生は5月に名古屋城・名古屋港水族館に出かけました。出身小学校が異なる生徒で班を作り、クイズラリーや施設の見学といった活動を通して交流を深めました。

## 修学旅行 東京方面(浅草・江戸文化体験・ディズニーシーなど)



3年生は6月に2泊3日で東京方面に行きました。さまざまな活動を通してクラスの仲間との絆を深め、江戸文化体験では、世界に1点ものとなる自分の作品を作りました。



## 『原爆投下により引き起こされたこと』

弥富北中学校 廣間 遥翔

私たちは、実際に広島へ行き、自らの目で見たり聞いたりすることで、資料で調べること以上の体験ができたと思う。資料館では、原爆被害を伝える写真のあまりの凄惨さに思わず目を背けなくなった。だれもが経験できるものではない広島研修で得たことを、これからの平和学習につなげていきたい。

### 【なぜ水を飲んだ被爆者は亡くなってしまったのか】

被爆して体に大きなダメージを負った人は、体も心も限界の状況であった。その状態で水を飲むと、安心して緊張が解け、亡くなってしまったそうである。最初に「水を飲ませてはいけない」と聞いたときに、間違った情報が広まっていたのではないかと考えた。しかし、水を飲むことが死の引き金になるほど極限の状態に追い込まれていたことを知り、原爆による被害の悲惨さを感じた。



### 【原爆による後障がい】

被爆の後障がいの一つに、ケロイドがあげられる。ケロイドは皮膚の細胞が異常に増え、痛みやかゆみを伴う障がいのことである。さらに、この障がいを負った人々は、身体的苦痛だけでなく、差別による精神的苦痛とも戦わなければならなかった。これらの事実は、後世に語り継がなければならない、原爆が恐ろしいものであることを裏付ける証拠であると感じた。

## 『原爆(戦争)の恐ろしさ』

弥富北中学校 山下 唯愛

広島研修に行く前、私は原爆の恐ろしさや悲惨さを甘く見ていた。しかし、資料館で写真や展示品を見ると、事実は想像していたものとは比べものにならないほどひどいことを知った。今回の研修では、教室では学びきれないことをたくさん学ぶことができ、二度と戦争が起こらないようにしなければならぬと、強く思えるようになった。次の世代も同じような考えを持てるようにするためにも、広島研修は今後も続いていくべき活動だと思った。

### 【本物のしげるくん弁当を見て】

資料館に展示してあったしげるくん弁当は、お弁当の形は分かって、中身は土のように見えるものだった。自分が実際に食べたお弁当が、しげるくんが食べる予定だったものだとするならば、今回食べたことには意味があると思った。

### 【原爆投下から9年後、急に病におそわれた佐々木禎子さん】

禎子さんは、2歳のときに被爆し、それから9年間元気に暮らしていた。ある時、体がだるいと感じ始めた禎子さんは何度も検査を受け白血病と診断された。苦しい闘病生活の中、鶴を折り、周りの人に心配させないように元気にふるまっていた禎子さんだったが、その後亡くなってしまった。禎子さんのように、被爆した人はいつ病気を発症してもおかしくない状況で生きていたと思うと、原爆の恐ろしさをより強く感じた。

